

## 令和6(2024)年度アクティブ・ラーニングプログラム一覧

### 活動学期: 通年

No.	プログラム名 担当教員	プログラムの概要	単位認定基準	認定単位数	対象 募集人数
1	超高齢社会の課題解決実践Ⅲ - 多摩市をフィールドとして 梅澤 佳子	【プログラムの目的】 本プログラムは「グローバル人材の育成」という寺島学長の教育方針に則り、高齢核家族・単身世帯の多い多摩ニュータウン、特に多摩市内の高齢世帯の課題解決に向けて市・企業・と連携して地域活動を実践するものである。活動を通して、 ①高齢社会の現状と課題を“現場に出て”体験し理解を深める。 ②地域を支える公助、互助、共助の組織について理解を深める。 ③事業計画に基づくチームビルディング、マネジメントを学ぶ。 ④社会人基礎力（3つの力）の向上を図る。 以上4点を目的とする。 【プログラムの内容と方法】 具体的には株式会社御用聞き、多摩市協創推進室（2024年度新組織）との連携・指導の下、多摩市内中心に下記3点を行う。 ①地域福祉情報の収集②地域福祉イベント運営、コミュニティセンターイベントへの参加協力③高齢世帯を中心とした困り事への対応等の活動 活動については他大学メンバーも含め対面・オンラインミーティングで共有し、解決の方策を考え実践する。PDCAを回しながら地域での活動を深化させていく。	【単位認定基準】 1. 事前・事後のミーティングにしっかりと受講した。 2. 現地実習に意欲を持って取り組んだ。 3. 報告書等を提出した。 4. 本講義の目的を理解し、上述した単位認定基準1～3の項目を悉く行い、到達目標に至ることが出来た。 【評価配分】 現地実習（70%）、報告書等の提出（30%）※ミーティングへの参加は必須。	4	【対象】 1～4年次 【募集人数】 15名程度
2	フットサルを通じた地域貢献イベント実施 杉田 文章	多摩大学による地域社会への貢献活動の一環として、小学生年代の児童を対象としたイベントを行っている。対象とする子供たちの範囲を広げ（たとえば競技未経験者）、児童のスポーツ体験の場を提供し、地域社会と多摩大学との接点と絆を強め、この活動を通じて、学生が向き合っている競技スポーツの価値への気づきを深め、サプライヤやスポンサーとの関係の在り方についても学ぶ場とする。また、諸マネジメント活動を通じて、プロジェクトの企画、遂行能力を養う。	【内容】 事前学修として、スポーツビジネスにおける広報の全般を学ぶ。産業経済の中で、スポーツコンテンツの位置づけ、意義、そこでの組織や個人の働き、観客、サポーター等の動向、SNSの役割、現状と問題点、などを俯瞰しながら、自分たちの活動の意義や課題点について把握する。 他の類似事例を複数取り上げ、その実際を俯瞰的に把握し、実際の企画実施展開に生かす。 事後学修は、実際に行った活動全般を振り返り、より貢献度の高い活動を展開するための経験値を可視化して残すことで、今後に生かせるようにする。 事前：少なくとも数時間から十数時間 事後：少なくとも数時間程度は行い、記録と報告書に出力する。	2	【対象・募集人数】 フットサル部学生・入部予定の新1年生を含め、最大22名 【対象・募集人数】 一般学生・最大5名程度まで

### 活動学期: 春学期

No.	プログラム名 担当教員	プログラムの概要	単位認定基準	認定単位数	対象 募集人数
3	CGクリエイション 彩藤 ひろみ 出原 至道 新西 誠人 菅沼 睦 他ICT関連教員数名	3DCGを自由に使いこなせるよう、目標を定め、発表できるまでにする。 基本的に週1回1コマ実施する。	【認定基準】 1) 週1回の集合時に学修意欲をもって参加していた。 2) 事前・事後学修を含み、与えられたテーマをこなし、成果を出した。 3) 本講義の目的を理解し、到達目標に至ることができた。 上記の内容を含め、十分な成果が認められた場合、単位を認定する。 ○評価配分 週1回の集合時にテーマに沿って設定した自分の課題を（事前事後学修成果を含めて）よくこなしている(30%)、積極的発言など(20%)、最終成果への貢献(50%)	2	【対象】 1～4年次 【募集人数】 設定しない(最大30名程度が理想)
4	ゲームクリエイション 彩藤 ひろみ 出原 至道 新西 誠人 菅沼 睦 他ICT関連教員数名	チュートリアル研究から始め、オリジナルゲームへの改変など、目標を定め、発表できるまでにする。	【認定基準】 1) 週1回の集合時に学修意欲をもって参加していた。 2) 事前・事後学修を含み、与えられたテーマをこなし、成果を出した。 3) 本講義の目的を理解し、到達目標に至ることができた。 上記の内容を含め、十分な成果が認められた場合、単位を認定する。 ○評価配分 週1回の集合時にテーマに沿って設定した自分の課題を（事前事後学修成果を含めて）よくこなしている(30%)、積極的発言など(20%)、最終成果への貢献(50%)	2	【対象】 1～4年次 【募集人数】 設定しない(最大30名程度が理想)
5	競技プログラミングII 出原 至道	TOPSIC / AtCoder / PG Battle を利用した競技プログラミングによって、本質的な論理思考力とコーディングスキルを向上させる。IIでは、平均的なコーディングができる学生を対象に、文章で指示された機能を解釈し、効率的で高速なアルゴリズムで実装できることを目標とする。 競技プログラミングの成果は、情報系企業の採用・新人研修で利用が拡大している。単にプログラミング言語を学ぶだけでは、意味のあるプログラムを書くことはできない。本プログラムでは、学生に、社会的に評価されるプログラミング能力を身につけさせる。学生は、毎週一度、問題の解法を持ち寄り共有する。 一般的なコーディングスキルを必要とするため、AtCoder のレーティング 200 以上の者に履修を限定する。ただし、面談などによって同等以上のプログラミングスキルを習得していると認められるものの履修を認める。	【認定基準】 合計 42 時間以上の学修時間をかけた上で、科目単位認定締切日の直近 1 ヶ月のいずれかの時点で、以下の基準のいずれかを満たすこと。 1) AtCoder のレーティングで 300 以上 2) TOPSIC のレーティングで、Grade 3 以上 3) 上記基準と同等の客観的成果（AtCoder 模試など）	2	【対象】 2～4年次 【募集人数】 最大20名
6	統計検定3級 久保田 貴文	本プログラムでは、一般財団法人である統計室保証推進協会が認定している「統計検定」の中の1つの資格である「統計検定3級」の資格を取得すべく、その基礎固めとなる統計的内容について座学で学修するプログラムである。想定する受講生は、統計検定3級取得者を目指す者であるが、座学型のALであるため、資格合格の可否にかかわらず、15回の講義および最終レポートにより単位を認定する予定である。 説明会を4月9日（火）昼休み（12:15-12:45）223教室にて行う。 テキストは「日本統計学会公式認定 統計検定 3級・4級 公式問題集（CBT対応版）」を用いる。	【認定基準】 毎回課題を提出すること（授業（前後を含む）2時間×15回、および上記の事前・事後学修3時間×15回）、加えて最終課題を指定日までに提出すること。最終課題については、第14回目頃までにアナウンスする。	2	【対象】 2年次 【募集人数】 20名
7	高難度中国語文および中国関係論文の教員参加学生輪読I 水盛 涼一 バートル	中国語能力検定には世界規模のものとして漢語水平考試（中国語発音はHanyu Shuiping Kaoshi、その頭文字をとりHSKと呼称）が存在する。このHSK試験は中華人民共和国の教育部（日本の文部科学省に相当）の管下にある中華人民共和国国家漢語国際推進指導小組弁公室（略称は国家漢弁）が実施しており、世界最大規模を誇る。このうち最高難度である6級（最低難度は1級）長文読解問題は特に難問として知られる。 そこで本プログラムでは、中国のパワーエリート向け経済誌の時事解説記事や古典中国語（いわゆる漢文）の長文読解を輪読形式で実施していく。輪読とは、学生一人一人が輪読して読解し解釈を発表した上で互いに解釈の相違を討論する形式のアクティブ・ラーニングである。今次プログラム参加学生は、課題の高難度中国語文について事前予習として日本語翻訳および注釈付与を試み、当日に予習成果の発表を行い、参加学生による相互討論を経た上で、列席の教員が最終添削を行う。 具体的な輪読予定テキストは、現代の経済誌として『瞭望新聞週刊』（中国国営通信社である新華通訊社の系列にあたる）、また古典中国語として清代（1616年～1912年）の『点石齋画報』（1884年から1898年まで毎週刊行）、『清稗類抄』（1917年出版）といったものを予定する。なお伝統中国から続く中国文化の理解を目指しつつ、並行して繁体字（香港台湾で使用）、簡体字（大陸で使用）、常用漢字（日本で使用）への習熟を企図する。なお具体的な参加学生像として高度中国語能力獲得希望者を想定する。 また秋学期の輪読IIでも引き続き清代を扱う予定である。その途次には中国人留学生の助力を積極的に仰ぐ（主には日本語能力がおしなべて高い水準にある広東財経大学からの交換留学生を想定）。	【認定基準】 非常に読解困難な中国語文について、世界最大規模の中華辞典（中国語を中国語で解説する辞典）や関連する資料を利用し読解を試みる。2021年秋学期・2022年度・2023年度では、学生は5行につき10時間（600分）ほどの予習を必要とした。発表につき60分、また事前学修につき600分、事後学修につき30分、合計で690分の学修を15回にわたって実施し、合計10350分（172時間30分）の学修を目指す。テキストの難度は教員が自負するものではないが、事前学修は学生の個人的な努力によるものなので、正課1回90分から換算し2単位を付与する。	2	【対象】 2～4年次 【募集人数】 3名程度
8	社会調査のための基礎知識習得とデータの活用 加藤 みずき	本講は社会調査士認定科目のA群に該当し、社会調査における基本的な内容について習得を目指すものである。 この講義は、社会調査の目的と方法についての基礎的な知識の習得を目指して実施するものである。調査の必要性やアプローチの方法、標本抽出法などのさまざまなデータ収集法について、その特性を学び、適切な調査設計を行えるようにする。 PBL型で調査の重要性や調査方法の特性について理解する。	【認定基準】 毎回の講義での課題提出が10回、かつ最終課題作成・提出。	2	【対象】 2年次 【募集人数】 10名程度

令和6(2024)年度アクティブ・ラーニングプログラム一覧

活動学期:秋学期

No.	プログラム名 担当教員	プログラムの概要	単位認定基準	認定単位数	対象 募集人数
9	VR・AR・AI 彩藤ひろみ 新西誠人 菅沼 睦 出原至道 他ICT関連教員数名	3DCG技術やイラスト、動画などの応用技術としてのVR(バーチャルリアリティ)やAR(オーグメンティドリアリティ)の作成に向けて知識をつけること、AIとの連携などでユーザーインターフェースのプログラムを作成する。Unityなどのゲームエンジンを使えると作成が楽になる。	【認定基準】 1) 週1回の集合時に学修意欲をもって参加していた。 2) 事前・事後学修を含め、与えられたテーマをこなし、成果を出した。 3) 本講義の目的を理解し、到達目標に至ることができた。 上記の内容を含め、十分な成果が認められた場合、単位を認定する。 ○評価配分 週1回の集合時にテーマに沿って設定した自分の課題を(事前事後学修成果を含めて)よくこなしている(30%)、積極的発言など(20%)、最終成果への貢献(50%)	2	【対象】 1~4年次  【募集人数】 設定しない(最大30名程度が理想)
10	競技プログラミング実践 出原 至道	本プログラムは、8月から11月中旬(コンテストは例年10月下旬の間)に実施される。 本プログラムでは、受講生は、株式会社システムインテグレーション主催「企業・学校対抗プログラミングバトル(通称PG Battle)」に参加し、成績を残すことを目標とする。この準備のために、客観的なプログラミング能力の評価を得ることができるAtCoder Beginner Contest(ABC)による学習とレーティングの獲得を行う。 競技プログラミングの成果は、情報系企業の採用・新人研修で利用が拡大している。単にプログラミング言語を学ぶだけでは、意味のあるプログラムを書くことはできない。本プログラムでは、学生に、社会的に評価されるプログラミング能力を身につけさせる。 平均的なアルゴリズムの実装力を必要とするため、AtCoderのレーティング200以上の者に履修を限定する。ただし、面談などによって同等以上のプログラミングスキルを習得していると認められるものの履修を認める。 また、「競技プログラミング」との同時履修を認めない。	【認定基準】 以下の基準をすべて満たすこと。 1) 合計70時間以上の学修時間 2) PG Battleへの参加 3) 科目単位認定締切日の直近1ヶ月のいずれかの時点で、以下の基準のいずれかを満たすこと ・AtCoderのレーティングで300以上 ・TOPSICのレーティングで、Grade 4以上 ・上記基準と同等の客観的成果(AtCoder模試など)	2	【対象】 2~4年次  【募集人数】 最大18名
11	競技プログラミングI 出原 至道	TOPSIC/AtCoder/PG Battleを利用した競技プログラミングによって、本質的な論理思考力とコーディングスキルを向上させる。Iでは、基礎的な入出力のコーディングができる学生を対象に、文章で指示されたおりのコーディングが正確に実装できることを目標とする。 競技プログラミングの成果は、情報系企業の採用・新人研修で利用が拡大している。単にプログラミング言語を学ぶだけでは、意味のあるプログラムを書くことはできない。本プログラムでは、学生に、社会的に評価されるプログラミング能力を身につけさせる。学生は、毎週一度、問題の解法を持ち寄り共有する。 ある程度の言語知識を必要とするため、「プログラミング入門」の単位取得者を対象とする。ただし、面談などによって同等以上のプログラミングスキルを習得していると認められるものの履修を認める。	【認定基準】 合計42時間以上の学修時間をかけた上で、科目単位認定締切日の直近1ヶ月のいずれかの時点で、以下の基準のいずれかを満たすこと。 1) AtCoderのレーティングで200以上 2) TOPSICのレーティングで、Grade 2以上 3) 上記基準と同等の客観的成果(AtCoder模試など)	2	【対象】 2~4年次  【募集人数】 最大20名
12	高難度中国語文および中国関係論文の教員参加学生輪読II 水盛 涼一 バトル	中国語能力検定には世界規模のものとして漢語水平考試(中国語発音はHanyuShuiping Kaoshi、その頭文字をとりHSKと呼称)が存在する。このHSK試験は中華人民共和国の教育部(日本の文部科学省に相当)の管下にある中華人民共和国国家漢語国際推進小委員会(略称は国家漢弁)が実施しており、世界最大規模を誇る。このうち最高難度である6級(最低難度は1級)長文読解問題は特に難問として知られる。 そこで本プログラムでは、中国のジャーナリスト向け経済誌の時事解説記事や古典中国語(いわゆる漢文)の長文読解を輪読形式で実施していく。輪読とは、学生一人一人が輪読して読解し解釈を発表した上で互いに解釈の相違を討論する形式のアクティブ・ラーニングである。今次プログラム参加学生は、課題の高難度中国語文について事前学習として日本語翻訳および注釈付を試み、当日に学習成果の発表を行い、参加学生による相互討論を経た上で、列席の教員が最終添削を行う。 具体的な輪読予定テキストは、現代の経済誌として『瞭望新聞週刊』(中国国営通信社である新華通訊社の系列にあたる)、また古典中国語として清代(1616年~1912年)の『点石齋画報』(1884年から1898年まで毎週刊行)、『清稗類抄』(1917年出版)といったものを予定する。なお伝統中国から続く中国文化の理解を目指しつつ、並行して繁体字(香港台湾で使用)、簡体字(大陸で使用)、常用漢字(日本で使用)への習熟を企図する。なお具体的な参加学生像として高度中国語能力獲得希望者を想定する。 なお春学期の輪読Iから引き続き清代を扱う。その途次には中国人留学生の助力を積極的に仰ぐ(主には日本語能力がおしなべて高い水準にある広東財経大学からの交換留学生を想定)。	【認定基準】 非常に読解困難な中国語文について、世界最大規模の中華辞典(中国語を中国語で解説する辞典)や関連する資料を利用し読解を試みる。2021年秋学期・2022年度・2023年度では、学生は5行につき10時間(600分)ほどの学習を必要とした。発表につき60分、また事前学習につき600分、事後学習につき30分、合計で690分の学修を15回にわたって実施し、合計10350分(172時間30分)の学修を目指す。テキストの難度は教員が自負するものではないが、事前学習は学生の個人的な努力によるものであるため、正課1回90分から換算し2単位を付与する。	2	【対象】 2~4年次  【募集人数】 3名程度
13	自動運転と社会 橋笠 堯士	自動運転の技術面、事業面、国内外の実証実験、実際の自動運転の試乗体験を踏まえ、高齢化社会・ドライバー不足・交通事故減少のために自動運転技術・サービスが社会においてどのように実装されるべきかを考察する講義プログラムである。 技術面に関しては、教員では補えない部分について、独立行政法人交通安全環境研究所の主任研究員などの招待講義・意見交換を行う。また、ソフトバンク子会社BOLDLYおよび大田区と連携し、羽田イノベーションシティにおける自動運転の実証実験(自動運転レベル4を目指す)に参画し、試乗体験や意見交換を行う。座学の回では各回で前回内容の小テストを実施する。実証実験参加実施日は、講義3回分を充当する。最終的に、実証実験参加後に、経営情報学部の立場から、ビジネスモデルとしての提言(報告書)を企業/行政に提出する。 【本ALプログラムのフロー】 ①座学→②専門家と意見交換→③自動運転試乗/現場と意見交換→④ビジネス的(事業構想的)な提言を企業/行政に提出する ①~②および③~④でインプットとアウトプットの経験を積み、学修して研究したことを企業/行政に提言として公表することで、社会に良い変革を与えることを目標とする。 ※なお、ゲストの都合により授業順序を入れ替えることがある。また、実証実験参加については、通常の時限とは別に行う可能性がある。	【認定基準】 ・36時間~45時間の学修時間で2単位	2	【対象】 2~4年次  【募集人数】 30名~40名程度
14	日本理解※留学生用プログラム 安田 震一	日本は外国人にどう見られていたのか。この疑問点を基礎として日本の歴史をたどりながら現代の日本までをまとめた講義内容となる。この科目を履修する留学生は「日本」や「日本文化」について理解できるようになる。 プログラムは基本的には座学タイプとする。履修者の意見をまとめ1回、多くても2回まで外に出ることを検討する。	【認定基準】 15回の講義の内、12回以上出席すること。さらには、講義中は今後の事を考えてノートをとるようにする。授業中の態度で減点することもある。	2	【対象】 1年次の留学生  【募集人数】 50名程度